

日本周辺国際魚類資源調査委託事業

津本欣吾・松尾剛平・久野正博・柴原浅行・谷水宗美・井上祐希・久保典敬・西川 俊

目的

太平洋を広く回遊するカツオ・マグロ類について、資源量評価やその資源動向の予測、我が国周辺への来遊量の予測等を行うために必要な科学的情報を収集、整理することを目的に、国立研究開発法人水産研究・教育機構国際水産資源研究所や各県水産試験場と連携して調査を行った。この中で、本県は県内所属船によるカツオ・マグロ類の漁獲状況や漁獲物の生物学的特性に関する情報収集を行った。

方法

1. 沿岸域における漁獲実態調査

県内におけるカツオ・マグロ類(クロマグロ, キハダ, メバチ, ビンナガ)の主要水揚港である和具, 浜島, 宿田曾, 紀伊長島, 尾鷲, 奈屋浦の各港において、漁業種類別の水揚状況を調査した。さらに、浜島, 贅浦, 奈屋浦, 尾鷲の各港においては、クロマグロを対象に漁獲物の魚体測定を行った。また、前年度に引き続き、クロマグロ加入状況の早期把握を目的とした曳縄標本船調査(GPS ロガーを用いた漁獲実態調査)を実施した。

2. 沖合、遠洋漁場における漁獲実態調査

沖合、遠洋漁場における中型、大型竿釣船の漁獲動向については、三重県漁労通信連合会および近海漁労通信会所属の標本船から「無線漁況連絡聴取簿(QRY 情報)」の提供を受け、カツオ・ビンナガ漁船の月別、旬別稼働隻数および漁獲量を緯度・経度毎に整理し、漁場の推移や漁況と海況との関連等について検討を行った。

結果および考察

収集した QRY 情報をもとに、本県所属船のカツオ・ビンナガ竿釣漁場の変遷を「平成 29 年における三重県中型・大型竿釣船のカツオ・ビンナガ漁況総括」としてとりまとめ、漁場探査の参考資料として関係漁業者に提供した。また、カツオ・マグロ類の漁獲動向、魚体測定調査結果を国際水産資源研究所に提供した。これらのデータは、太平洋におけるカツオ・マグロ類の資源量評価およびそれに基づく資源管理方策を検討する国際会議において活用されたほか、日本周辺海域への来遊量予測の科学的根拠としても利用された。資源評価や来遊量予測に関する結果の詳細については、関連報文で報告されるの

で、ここでは本県所属船の 2017 年漁期におけるカツオ・マグロ類の漁況概要をとりまとめた。

1. カツオ漁況

(1) 沿岸曳縄船

2017 年における三重県主要 4 港(和具・浜島・長島・尾鷲)の曳縄船によるカツオ水揚量は 83.1 トンで、前年(57.8 トン)の 144%、過去 10 年平均値(115.1 トン)の 72%となった(図 1)。春漁は振るわず、1~8 月の合計水揚量は過去 10 年同期平均値の 11%に留まった。しかし、9 月以降、熊野灘沿岸域に広く漁場が形成され、同月水揚量としては、1999 年以降、9 月は 2 番目、11 月は最高値を記録した。主要 4 港の水揚量と水揚隻数から求めた年間の平均 CPUE は 58kg/隻と前年(53 kg/隻)をわずかに上回った。

水揚げが多かった 9 月の魚体は銘柄極小(1kg 以下)、小(1~1.5 kg)が、11 月は中小(1.5 kg~2 kg)、小が主体であった

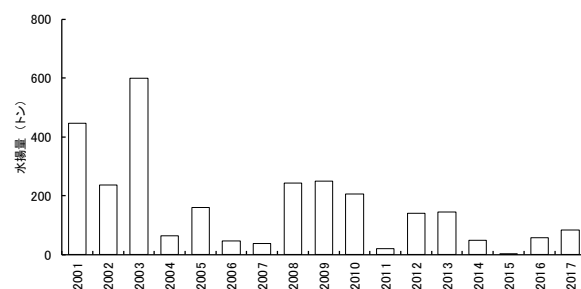


図 1. 沿岸曳縄船によるカツオ水揚量(主要 4 港)

(2) 小型竿釣船(19 トン以下)

2017 年における三重県主要 4 港(和具・浜島・長島・尾鷲)の小型竿釣船によるカツオ水揚量は 622.4 トンで、前年(504.7 トン)の 123%、過去 10 年平均値(385.1 トン)の 162%と近年では比較的高い水準で推移した(図 2)。

三重県所属の小型竿釣船は、4 月には高知県沖(大正瀬)を主体に操業し県内市場にも水揚げしたが、5 月中旬以降は伊豆諸島周辺海域で操業し、主に御前崎に水揚げした。9 月以降、熊野灘でも漁場が形成され、県内漁港への水揚隻数も増加した。

県内市場の水揚げデータによれば、4~8 月は、銘柄中(2~3 kg)、中小(1.5~2kg)主体に大(2.5~4 kg)、小(1~1.5 kg)が混じり、9 月は小、極小(1kg 以下)が主体で、10、11 月は特大(4 kg 以上)が主体となった。

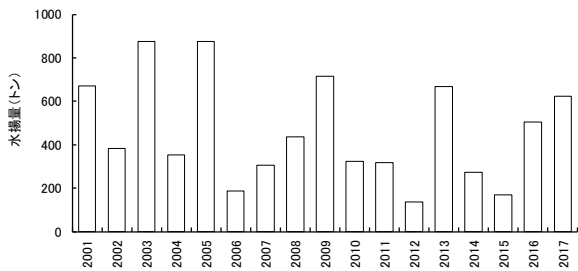


図 2. 小型竿釣船によるカツオ水揚量（主要 4 港）

(2) 中型竿釣船

QRY 情報（船間無線聴取簿）に基づく 2017 年の三重県中型竿釣船によるカツオ漁獲量は 4,950 トンで、低調であった前年（5,856 トン）を下回り、過去 10 年平均値（7,187 トン）の 82%にとどまり、記録が整理された 1987 年以降、最低の漁獲量となった（図 3）。

3 月までは中南海域主体の操業で、4 月に入り漁場は 140°E に沿って北上し、伊豆諸島周辺海域で操業した。5 月も伊豆諸島周辺で操業したが、5 月中旬以降房総半島東方 35°N に沿ってビンナガの漁場が形成され、7 月上旬までビンナガ主体の操業となった。7 月中旬以降は東北沖でカツオ主体の操業となり、8 月は東北沖（36～39°N，144～153°E）で漁獲がまとまり、9 月には沿岸域でも漁獲されたが、10 月に入ると CPUE は急減し、10 月末で全船操業を打ち切った。

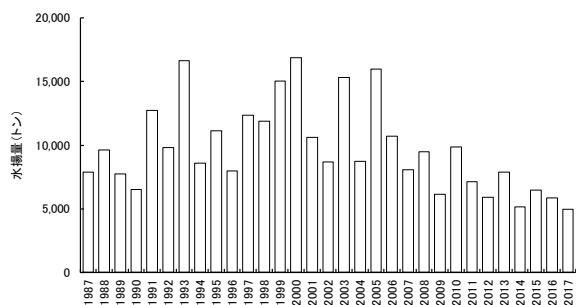


図 3. 三重県中型竿釣船によるカツオ水揚量

(3) 大型竿釣船

QRY 情報に基づく 2017 年の三重県大型竿釣船によるカツオ漁獲量は 1,991 トンで、前年（5,222 トン）の 38%，過去 10 年平均値（10,303 トン）の 19%と、漁獲統計が整理された 1993 年以降、最低の水準となった（図 4）。今年の漁獲量の大幅な減少は、着業船の減少（2016 年：5 隻，2017 年：2 隻）に起因するところが多いが、ここ数年は CPUE（1 日 1 隻あたりの漁獲量）も低水準で推移している。

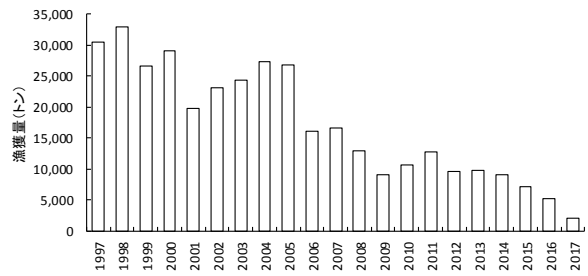


図 4. 三重県大型竿釣船によるカツオ水揚量

2. ビンナガ漁況

(1) 中型竿釣船

QRY 情報に基づく 2017 年の三重県中型竿釣船によるビンナガ漁獲量は 2,765 トンで、低調であった前年（1,978 トン）を上回ったものの、過去 10 年平均値（3,501 トン）の 79%と、近年では中程度の漁況となった（図 5）。

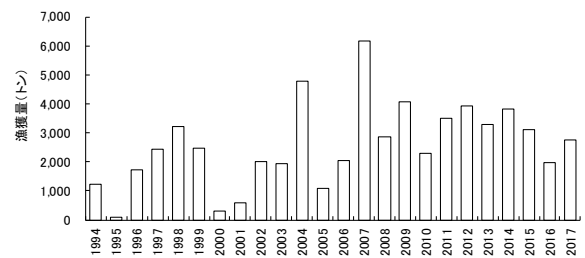


図 5. 三重県中型竿釣船によるビンナガ水揚量

(2) 大型竿釣船

QRY 情報に基づく 2017 年の三重県大型竿釣船によるビンナガ漁獲量は 324 トンで、1994 年以降最低の漁獲量となった前年（821 トン）をさらに下回り、過去 10 年平均値 2,765 トンの 12%に満たない低調な漁況となった（図 6）。漁獲量の大幅な減少はカツオ同様、着業船の減少によるところが多い。

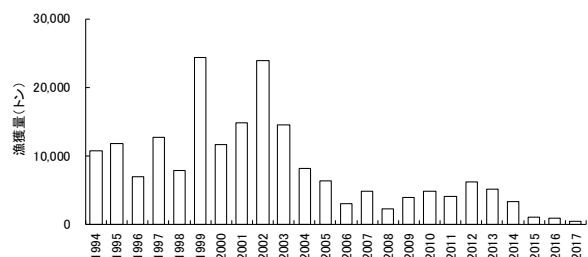


図 6. 三重県大型竿釣船によるビンナガ水揚量

3. クロマグロ漁況

(1) 漁業種別水揚げ状況

三重県主要 6 港における 2017 年のクロマグロ水揚量（全漁業種）は 4 トンで、前年（45 トン）、過去 10 年平均値（45 トン）を大きく下回り、1995 年以降最低の水

揚量となった。水揚げの主体となった漁業種類は、定置網、まき網であり、それぞれクロマグロ総水揚げ量の53%、40%を占めた。10月以降は、水揚げ規制によりほとんど水揚げされなかった。

(2) クロマグロ養殖用種苗（ヨコワ）の採捕状況

熊野灘沿岸域における2017年の養殖種苗用ヨコワ魚（曳縄）は、前年より10日遅い7月20日から始まり、9月上旬まで続いたが、県内養殖業者の池入れ予定数を満たすことなく終了した。標本漁協所属船による採捕尾数と有漁隻数から求めたCPUEは9.4尾/隻で、前年（11.9尾/隻）を下回ったが、極めて低調であった2012～2015年と比較すると高い水準であった（図7）。漁場は熊野灘北部に偏り、南部では極めて不漁であった。

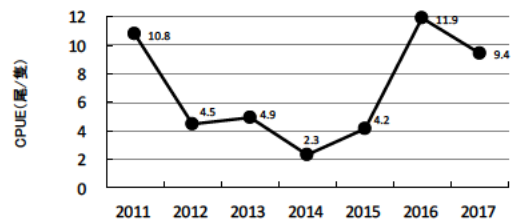


図7. 標本漁協所属船によるクロマグロ養殖用種苗（ヨコワ）CPUEの経年変化

関連報文

平成29年度国際漁業資源調査・情報提供委託事業報告書，国立研究開発法人水産研究・教育機構．

平成29年における三重県中型・大型竿釣り船のカツオ・ビンナガ漁況総括，三重県水産研究所．